

御坊祭の〈伊勢音頭〉

梁島 章子

はじめに

御坊祭の中では、いわゆる〈伊勢音頭〉が、「四つ太鼓」の囃し歌（伴奏歌）として歌われる。「四つ太鼓」の芸は、九つの氏子組、すなわち、中組、濱之瀬組、下組、紀小竹組、御坊町、名屋組、東蘭組、春日組、上組のすべてに存在する。

各氏子間で、伝承する〈伊勢音頭〉のふしの種類や詞章、「四つ太鼓」のリズムとの合わせ方などに違いが見られた。

そこで、各氏子組で「四つ太鼓」とともに歌われる〈伊勢音頭〉のふしや代表的な詞章を、「四つ太鼓」のリズムとともに、映像に記録した。その際、〈伊勢音頭〉の各氏子組でのとらえ方や位置づけなどを知るために、次のような質問項目を用意してたずねた（表1）。祭りの世話役や音頭の伝承者と話し合いながら質問を進めていったが、質問の順序や項目の内容、質問の仕方には、その場その場で変更する必要も生じ、以下の項目のすべてが含まれているわけではない。

表1 〈伊勢音頭〉収録調査での質問内容と質問設定の理由

質問回答者名	生年または生年月日
歌い手名	生年または生年月日
①いわゆる〈伊勢音頭〉の、組での呼び名はどのようなか？	
②「ふし」はいくつあるか？ 質問設定の理由：以下に示す三種のふしの存在の有無を知るため。 ・短いふし（七七七五型）・・〈伊勢音頭〉スタイル ・長いふし（間に、数え歌などをはさむ）・・〈道中伊勢音頭〉スタイル ・歌い手が交代するときの「つなぎ」のふし・・盆踊りの音頭に見られるスタイル	
③二つのふしがある場合、続けて（ミックスで）歌うことがあるか？ 質問設定の理由：短いふしと長いふしをどのように意識しているかを知るため。	
④祭りで、四つ太鼓に合わせて歌うほかに、この歌を歌う機会があるか？ 質問設定の理由：全国的に歌われている〈伊勢音頭〉の用途と比較するため。	
⑤歌詞（文句）について A. 歌う場所や歌う時間の決まっている歌詞（目的に合わせた歌詞）があるか？ 歌詞が特に決まって無いところでは、歌詞はどのように選ばれるか？	

質問設定の理由：〈伊勢音頭〉の持つ儀式的な要素や歌詞の内容への意識を知るため。

B. 他の組と共通の歌詞、あるいは、組での特有の歌詞についての意識や区別はあるか？

C. 歌詞のレパートリーの中から、次のような歌を歌ってもらう。

- ・歌う時間や場所の決まった歌（儀式的な歌）
- ・得意なふしや歌詞

ア、七七七五型 イ、長い（または、中くらい） ウ、つなぎ（交代）

⑥歌い手が四つ太鼓と合わせるときの「合わせ方の決まり」のようなものはなにか？

⑦伊勢音頭を歌う「歌い手」について

- A. 伊勢音頭を歌う「歌い手」は、何と呼ばれているか？
- B. 「歌い手」は、数ある役の中で、どのように決まるのか？
- C. 「歌い手」は、はじめて歌をおぼえるとき、どのように習い始めるか？
- D. おぼえるとき、また、歌うときの、むずかしい点はどのようなことか？
- E. 実際の祭りで、四つ太鼓と共に演じるときの気をつけていることやむずかしいことは何か？

⑧伊勢音頭の、組全体の芸能の中での位置づけは？

⑨ 新しくはじめた組には、そのときの歌や太鼓他、芸能の伝承、学習はどのように行われたか？

今回の映像は、調査の様子そのままを記録しているので、ここでは、調査の概観をいくつかの内容にまとめて、示すことにした。

I. 歌の呼び名について

表2は、質問①の結果をまとめたものである。

表2 歌の呼び名

氏子組	歌の呼び名
中 組	伊勢音頭または音頭
濱之瀬組	音頭

下 組	伊勢音頭
紀小竹組	音頭
御坊町（註１）	伊勢音頭
名屋組	伊勢音頭
東蘭組	伊勢音頭
春日組	音頭
上 組	伊勢音頭

註１：御坊町は、組の中がさらに七つの組に分かれている。七つの組で、共通の歌詞と異なる歌詞があるということであったが、七組すべての収録ができなかったので、今回は、御坊町全体としてまとめている。（以下、同じ）

歌の呼び名については、表２に見たように、「伊勢音頭」または「音頭」が用いられているが、中組のように、両呼び名を用いている氏子組もあった。

Ⅱ．歌っている「伊勢音頭・音頭」のふしについて

ここでは、質問②と③の、歌っている「伊勢音頭・音頭」のふしについて、結果をまとめる。

質問②のふしの種類については、表３に結果をまとめた。

一般的に〈伊勢音頭〉といった場合、詩型が七七七五の歌と、間に「ソレ」の囃し言葉を入れながら、数え歌や名所巡りなどをはさむ長い歌がある。表３では、前者を「短い歌」後者を「長い歌」とした。また、盆踊りの歌い手が交代するときのような歌を用いている場合は、「つなぎ（引き継ぎ・受け取り）」の歌として、表に加えた。

表３「伊勢音頭・音頭」のふしの種類について

○印：歌う △印：歌うこともある

氏子組	歌っているふしの種類		
	短い歌	長い歌	つなぎの歌
中 組	○	○	引き継ぎ・受け取り歌
濱之瀬組	○	△	あるが、歌わない
下 組	○	○	あるが、歌わない
紀小竹組	○	○ ながうた（註１）	あるが、歌わない

御坊町	○	○	引き継ぎ・受け取り歌
名屋組	○	○	
東菌組		○	
春日組		○	
上 組	○	○	引き継ぎ歌

（註１）紀小竹組では、長い歌にのみ「ながうた」の呼び名が使われている。

質問③は、長い歌は、例外はあるものの、短い歌の間（七七と七五の間）に、長い歌の特徴である数え歌や名所巡りなどをはさむことが多いので、短い歌と長い歌をどのように意識しているかを知るためのものであったが、どのグループも「ミックスで歌うことはない」ということで、両歌の詩型は、はっきりと区別されていた。

Ⅲ． 祭り以外で「伊勢音頭・音頭」を歌う機会について

全国的に歌われている〈伊勢音頭〉は、祝い歌として歌われることが多いが、他に神輿の宮入や神輿勇めなどにも歌われ、また、座興にも歌われている。

質問④は、このような用途と御坊祭での用い方を比較するために設定したものである。

結果を表４にまとめた。

表４ 祭り以外で「伊勢音頭・音頭」を歌う機会について

氏子組	祭り以外で歌う機会
中 組	結婚式など祝いの席で、「祝いめでた・・・」のような歌詞を歌うことが多い。最後の方で歌う決まりはない。
濱之瀬組	宴会の席で歌ったり、結婚式の余興で歌ったりする。
下 組	祭り以外では歌わない。
紀小竹組	祭り以外で歌うことはない。
御坊町	祝い歌として結婚式の余興で歌うことがある。
名屋組	昔は、棟上げや結婚式など、祝い事で歌ったが、今はあまり歌う場がない。
東菌組	以前は、祝い事で歌っていた。例えば、結婚式の出立ちの前や荷物を出すときなどに。相撲甚句も歌った。花嫁を家から歩いて送り出すことがなくなったので、今は、御坊祭りのときだけになった。

春日組	祭り以外で歌うことはほとんどないが、結婚式の余興で歌うこともあるであろう。
上組	結婚式など祝いの席での、最後の方で歌うことが多い。

表4によれば、現在は少なくなっているものの、祝い歌として歌われていたことが窺える。この回答の内容は、調査時の参加者の世代によって異なっていたように思われ、年配の出席者と若い出席者の、生活経験の差や時代の変化が関係していると考えられる。

IV. 各氏子組での歌詞の選び方や歌詞内容に対する意識について

質問⑤のABCは、次の三つの観点でまとめた。

- ア. 決まった場所で歌われる歌詞の有無および歌詞の選び方への意識
- イ. 歌詞のレパトリーの中での各氏子組独自（特有）の歌詞への意識
- ウ. アとイで示された歌詞への意識の結果、得意な歌詞（ふし）として歌われた「伊勢音頭・音頭」の歌詞

ア. 決まった場所で歌われる歌詞の有無および歌詞の選び方への意識

質問⑤のAは、多くの歌詞の中で、儀式的な要素を持ち、歌う場所の決まった歌や歌う場所を意識して選ぶ歌について知るために設定した。その結果を表5にまとめた。

表5 決まった場所で歌う歌詞の有無および歌詞の選び方への意識

氏子組	決まった場所で歌う歌詞の有無	歌詞の選び方への意識
中組	無	気持ちを伝えられるような歌詞を選ぶようにしている。 ・祭りのはじめには、めでたい歌詞「祝いめでたの若松様」を歌うようにしている。 ・神様の前では「お伊勢さんを歌った歌詞」を選ぶようにしている ・地下まわりでは、ご祝儀をもらうことがあり、屋敷が栄えるような歌詞「ここの屋敷はめでたい屋敷」のような歌詞を選ぶ。
濱之瀬組	無	雰囲気を選んでゆく。 ・一番最初（朝の一発）は「祝いめでた・・・」を選ぶ。 ・四つ太鼓の勢いとか、まわりの観客とかを考えて選ぶ。 人が少なければ静かな歌詞を選ぶ。
下組	無	はじめは短い歌ではじめ、「伊勢は津で持つ」などを歌う。 ・道中で盛り上げるときは、「桃太郎」を歌う。

		・地下で遊ぶときは創作の歌を歌うこともある。
紀小竹組	無	歌う人の気持ちで選ばれる。 ・神輿が町内を通るときは、四つ太鼓で迎えるが、そのときにはめでたい歌詞「祝いめでたの」や「お伊勢詣りで」などを選ぶ。
御坊町	無	歌い手の気分で選ぶ。 ・七つの組の歌は特にないが、「御坊町」を歌った歌があり、皆が盛り上がったときには、そのような歌詞を選ぶ。
名屋組	無	伊勢音頭は道中で歌うもので、道中の掛け声の音頭であり、宮に入ったら歌わない。 ・宮入前には「名屋組ねばしていこう、頑張っていこう」のような歌詞を選ぶ。 ・元気づけるときには「名屋の若い衆・・・」の歌詞を選ぶ。
東菌組	無	歌い始めの歌詞は音頭取りにまかされている。 ・宿に帰って最後に歌う東菌の歌がある。
春日組	無	組の決まりはないので、得意な曲を決めておき、選ぶ。
上 組	無	はじめは短い歌詞を2、3曲。四つ太鼓が傾いてきたら、「元気が出るような歌詞」を歌う。 例：「若い衆ねばそじゃないか」

表5に見るとおり、全氏子組に、決まった場所で歌う歌はなかったが、歌い手は、それぞれに、歌う場所や雰囲気を考えながら歌詞を選び、歌い手としての気持ちを表現することに、心を砕いていた。

合わせて、短い歌と長い歌（紀小竹組では、「ながうた」）を歌っている氏子組では、両詩型の歌をどのように歌い繋いでいくかについて、また、一つの詩型を歌う氏子組では、歌い手間の歌詞の選び方について、それぞれ工夫が行われていた。発言がなされた氏子組の例をいくつか掲げる。

例：・短い歌、長い歌は、歌い手が自由に選ぶ（上組、中組など）。

- ・長い歌ばかり続くと間延びするので、長短をバランス良くつないで歌う（名屋組）。
- ・自分の好きな歌詞を選ぶが、なるべく他の歌い手と重ならないようにする（濱之瀬組）。
- ・はじめは短い歌ではじめるが、それが三回程続くと長い歌を挿む（下組）。
- ・移動中は、進行がスムーズにいくように短い歌を選ぶことが多いが、四つ角や交差点などでは、「ねばす」ため、「ながうた」を選ぶ。 短い歌と「ながうた」は、半々くらい歌われる（紀小竹組）。

イ．歌詞のレパートリーの中での各氏子組独自（特有）の歌詞への意識

質問⑤のBについてまとめたものが、表6である。

表 6 氏子組独自（特有）の歌詞への意識

氏子組	独自（特有）の歌詞への意識
中 組	組のマークの「盃」を歌っているもの。
濱之瀬組	濱之瀬は漁師町なので、海に関した歌詞が多い。こうした歌詞が好きな歌や得意な歌として選ばれることが多い。
下 組	他の組と共通の歌詞が多いが、「下の若い衆」の歌詞もある。
紀小竹組	創作された歌詞を歌う後輩もいるが、紀小竹を歌った歌詞は少ない。
御坊町	「広義の御坊」を歌った歌詞も多いが、「御坊町」を歌った歌詞もまた、多い。
名屋組	日高川が近いので、「日高川口に」を歌った歌は独自のものである。
東菌組	宿に帰って最後に歌う東菌を歌った歌がある。他のグループと異なる歌詞を持つという意識もある。
春日組	春日組は、新しく四つ太鼓を立ち上げるときに、東菌組から音頭を習った。春日組としての歌詞も作ったが、伝承しているものと歌わなくなったものもある。東菌組から伝承された歌詞にも、残っているものと歌わなくなったものがある。
上 組	先輩から伝承された歌詞を歌う。新しい創作はない。歌詞の中に「上（かみ）の若い衆」を歌った歌詞がある。

表 6 に見るように、全氏子組に独自の歌詞への、こだわりの意識が感じられた。「組・町」や「〇〇の若い衆」などを歌ったものは、ほとんどが七七七五型の歌詞であるが、共通の歌詞の部分を変え歌にしたものが多い。

ウ．収録した「伊勢音頭・音頭」のまとめ

表 7 は、「得意な歌」「氏子組独自の歌」「雰囲気を考えて歌う歌」などを依頼して歌われた歌である。歌詞の「歌い出し」で紹介している。

表 7 収録した「伊勢音頭・音頭」

氏子組	歌い手（生年）	短い歌・長い歌・つなぎ歌（註）
中 組	歌い手（平 4 生）	短い歌 ◆祝いめでたの ◆わしがお国は
		長い歌 ◆あいのお山には
		つなぎ歌 ◆ぼくの音頭は
	歌い手（昭 37 生）	短い歌 ◆お伊勢詣りで ◆さいた盃
		長い歌 ◆ゆうべ見た夢
		つなぎ歌 ◆お受けしました ◆ぼくの音頭も

	歌い手（昭 50 生） 短い歌 ◆おまえ百まで ◆そろりそろりと ◆沖の暗いのに 長い歌 ◆火事と喧嘩は つなぎ歌 ◆ぼくの音頭は 歌い手（昭 37 生） 短い歌 ◆岬かわせば ◆今夜ここに寝て ◆さいた盃 ◆安芸の宮島 長い歌 ◆娘十七、八
濱之瀬組	歌い手（昭 39 生） 短い歌 ◆祝いめでたの ◆濱の若い衆ら 長い歌 ◆紀州日高の 歌い手（昭 58 生） 短い歌 ◆なくなげくな ◆いれておくれよ ◆締めて頂戴 歌い手（昭 60 生） 短い歌 ◆岬かわれば ◆日高川口に ◆恋にこがれて 歌い手（平元生） 短い歌 ◆鯉の瀧登り ◆お伊勢詣りに 長い歌 ◆火事と喧嘩は 歌い手（昭 60 生） 短い歌 ◆どんと押せ押せ ◆沖のかもめに ◆とろりとろりと
下 組	歌い手（昭 57 生） 短い歌 ◆日高浜辺に ◆沖のかもめに 長い歌 ◆今度この家（いえ）に 歌い手（昭 56 生） 短い歌 ◆お伊勢詣りで ◆竹に雀は 長い歌 ◆火事と喧嘩は 歌い手（昭 58 生） 短い歌 ◆伊勢は津で持つ 長い歌 ◆昔々の ◆紀州紀の国
紀小竹組	歌い手（昭 50 生） 短い歌 ◆お伊勢詣りで ながうた ◆ここのお家（うち）は ◆娘十七、八 歌い手（昭 52 生） 短い歌 ◆おまえ百まで ◆鯉の瀧登り ◆い（行）たら見てこい 歌い手（昭 53 生） 短い歌 ◆恋し恋しと ながうた ◆夕べ見た夢は ◆〇〇の床の間の 歌い手（平 3 生） 短い歌 ◆立てば芍薬 ながうた ◆漁師波の上 ◆紀州紀の国は
御坊町	歌い手（昭 44 生） 短い歌 ◆ここは紀の国 長い歌 ◆ここのお家（いえ） つなぎ歌 ◆わたし音頭は 歌い手（昭 37 生） 短い歌 ◆来いとゆうたとて 長い歌 ◆今年ゃ魚衆 つなぎ歌 ◆お受けしました

	歌い手（昭 48 生）	短い歌 長い歌 つなぎ歌	◆わたしゃ音頭は ◆い（行）たら見てこい ◆夕べ見た夢 ◆引き受けました ◆わたし音頭は
	歌い手（平元生）	短い歌 長い歌 つなぎ歌	◆お伊勢詣りで ◆娘十七、八 ◆わたし音頭よ
	歌い手（昭 63 生）	短い歌	◆御坊よいとこ ◆まだもあります
	歌い手（昭 54 生）	短い歌 長い歌	◆とろりとろりと ◆紀州紀の国
	歌い手（昭 56 生）	短い歌 長い歌	◆咲いた花より ◆めでためでたの
	歌い手（昭 59 生）	短い歌 長い歌	◆立てば芍薬 ◆紀州名所は
	歌い手（昭 48 生）	短い歌 長い歌	◆御坊の乗り子は ◆火事と喧嘩は
名屋組	歌い手（昭 60 生）	短い歌 長い歌	◆日高川口に ◆鯉の瀧登り ◆今夜ここに寝て ◆火事と喧嘩は
	歌い手（昭 55 生）	短い歌	◆とろりとろりと ◆伊勢は良いとこ
	歌い手（昭 57 生）	短い歌	◆鯉の瀧登り ◆い(行)たら見てこい ◆伊勢は津で持つ
東菫組	歌い手（昭 36 生）	長い歌	◆紀州名物 ◆お酒飲む人は
	歌い手（昭 62 生）	長い歌	◆日高名所は ◆一人娘を
	歌い手（昭 39 生）	長い歌	◆秋の夜長も ◆お国自慢を
春日組	歌い手（昭 59 生）	長い歌	◆黄金花咲く ◆今年や豊年だよ
	歌い手（昭 32 生）	長い歌	◆めでためでたの ◆御坊祭は
	歌い手（昭 48 生）	長い歌	◆各地名所よ ◆花を集めてよ
上 組	歌い手（昭 29 生）	短い歌 長い歌 つなぎ歌	◆いたら見てこい ◆来いというたて ◆火事とけんかは ◆僕の音頭は
	歌い手（昭 44 生）	短い歌 長い歌	◆紀州秋晴れ ◆えびすだいこく ◆破れ障子に ◆上（かみ）の若い衆 ◆押せよ押せ押せ ◆わたし魚屋で

（註）表 7 は歌われた順ではなく、短い歌・長い歌・つなぎ歌をまとめて示している。

V. 歌が四つ太鼓と合わせるときの決まりについて

質問⑥は、歌い手が「四つ太鼓と合わせるときの決まり」についてたずねたものである。各氏子組の両者のリズムの合わせ方には違いが見られたので、設定したものであるが、「合わせ方についての考え方」は、ある程度聞くことができたので、ここでは、その考え方をまとめた（表8）。なお、両者のリズムの合わせ方の違いについては、次の機会に考察できればと思う。

表8 歌が四つ太鼓と合わせるときの決まり

氏子組	決まりの有無	合わせる工夫のいろいろ
中 組	特になし	・ 歌い手が四つ太鼓に合わせる。 ・ 四つ太鼓の最後の囃子が終わってから歌い出すのが本来であるが、若衆が盛り上がっているときは、囃子が終わらないうちに、重ねるように歌い出すのが良いとされている。「音頭取りのさじ加減」である。
濱之瀬組	特になし	・ 四つ太鼓の最後の囃子に歌を重ねるのは、早めに歌い出して重ねる「美」もあるが、「アーヨー」を重ねて歌っておくと、すぐに歌が出るから意識して重ねている。
下 組	特になし	・ 四つ太鼓の囃子の途中から入るのは、なにも音のない部分をなくすためであり、途中から入っておくと歌がきれいに入る。乗り子のリズムも歌もきれいに聞こえる。 ・ 途中から入る方法を先輩から聞いて、その歌い方が定着している。
紀小竹組	特になし	・ 四つ太鼓と合わせるとき、囃しの途中で入るのは、先輩がやっていて覚えた。本番は、重なることもあるが、あまり重ならないように歌う。休憩中は重ねるようにして、「音頭の長さ」を縮める。太鼓だけの部分が長くないようにと教えられた。練習でも同じように歌っている。
御坊町	特になし	・ 四つ太鼓が、音頭の自由な歌い方の変化に合わせる。 ・ 御坊町では、四つ太鼓の乗り子は各組のメンバーがまざっているが、異なる組の音頭にも合わせられる。 ・ 囃子の途中で歌い出すのは自由で、自分の入りやすいところで入る。
名屋組	特になし	・ 四つ太鼓が疲れてきたら、下がった方へ移動して音頭を取る。
東蘭組	特になし	・ 四つ太鼓の囃子の途中から歌い始めるのは、歌と揃うようにすることが目的で重ねる。 ・ 宮入のとき、音頭は宮へ入る前に、芝で終わるように気を付けている。

春日組	特になし	・一人の音頭で、二つの四つ太鼓（大人の太鼓と子どもの四つ太鼓）を動かすので、両方に聞こえるように歌うことがむずかしい。 ・太鼓と音頭とがよく合うように、練習では、できるだけテンポを遅くして合わせている。
上組	特になし	・長短の歌詞の場合、途中の囃し言葉（掛け声）（「ソレ」または「ホラ」「ソラ」など）で合わせる。 ・乗り子に聞こえるように歌う。

表8に見るように、歌と四つ太鼓の合わせ方の決まりは、全氏子組が持っていなかったが、両者を合わせる難しさが質問内容であったので、それぞれの合わせ方の工夫を知ることができた。

VI. 「伊勢音頭・音頭」の歌い手について

質問⑦のAでは、歌い手の呼び名を、質問⑦のBでは、歌い手がどのように決まるかを、たずねた。表9は、それらをまとめたものである。

また、質問⑦のCでは、歌い手が歌をおぼえる過程を、質問⑦のDでは、覚える過程での難しさを、たずねた。表10がそれらのまとめである。

質問⑦Eの回答については、項目Vで触れたので、ここでは省略する。

表9 歌い手の呼び名と歌い手の決め方

氏子組	歌い手の呼び名	歌い手の決め方
中組	音頭取り	・音頭取りは決まってない。当日、四つ太鼓をかついでいる人の中の、誰でも音頭を取って良い。 ・乗り子の経験者が音頭取りになることが多い。
濱之瀬組	音頭取り	・本人の希望を第一に考えるが、音頭取りの先輩が見て、「この人なら音頭が取れそう」と判断して選抜する。
下組	音頭 (音頭取りとも)	・やりたい人もいるが、すすめられることもある（先輩に見込まれて、お願いしますといわれる）。 ・誘っても断られることがあるが、今年は、引き受けてもらえた。
紀小竹組	音頭取り	・希望者が多い。 例：四つ太鼓が好きで乗り子になったときから、歌い手にあこがれてきて、希望した。 ・子どもの四つ太鼓では、小学生で歌っている子もいる。 ・乗り子の経験者が多いが、経験がなくても普段から鼻歌で歌っていて希望した。

御坊町	音頭	・御坊町は、組によって表現は異なったが、推薦もあるものの、ほぼ立候補制である。 - 例：音頭は歌いたい人（東下組） 歌いたい人に教えて育てる（東上） 歌える人が歌う（西下、古寺内） など ・音頭には乗り子の経験者が多い(五割ほど)
名屋組	音頭取り	・歌いたい希望者が音頭取りになることが多い。 ・音頭を取ることが好きで、歌える人や声のよく通る人が集まってきて歌っている。
東菌組	音頭取り	・自分から「やります」という意思表示をして練習をはじめる。立候補制である。
春日組 (註1)	音頭取り	・祭りに加わったのが新しく、立ち上げたときには、道具も歌もなかった。 ・今調査の歌い手（s 3 2 生）は、そのときからのメンバーであるが、指名されて、東菌組に練習に「行かされた」とのことであった。 ・音頭取りの希望者は少ない。興味は持っていても、恥ずかしがって歌わない。 ・呼びかけて、興味ある人を育てる
上 組	音頭取り	・歌いたい希望者が音頭取りになることが多い。 ・元乗り子を経験した人が音頭取りになることが多い。 乗り子のときに聞いた音頭をおぼえていることが多いので。

（註1）質問⑨は春日組への質問であったが、内容が⑦に含まれているので、表9と表10にまとめている。

表9に見るように、歌い手の呼び名については、「音頭取り」が多く使われているが、「音頭」を用いているところもある。

歌い手の決め方については、例外的に「推薦」や「選抜」が行われる場合もあるが、ほとんどの氏子組で、希望者による「立候補制」がとられている。希望者には、乗り子の経験者が多く、現在、音頭取りあるいは音頭を務めている人も、乗り子出身者が多くの割合を占めていた。

表10 歌い手が歌をおぼえる過程およびおぼえる過程での難しさ

氏子組	歌い手が歌をおぼえる過程やその過程での難しさなど
中 組	・音頭取りは、個人で練習している人もあるかもしれないが、祭りで聞いて覚える。 ・乗り子の練習のために音頭を取るが、音頭取りとしての練習はしない。

	・むずかしいことは、一人の音頭取りは同じ歌詞を歌わないようにしているので、歌詞が思い出せないときである。
濱之瀬組	・選抜することがあるので、指導する場面もある。 ・はじめに歌詞を覚えて、先輩の歌を聞きながら覚える。 ・むずかしいところは、声が聞こえないと困るので、腹から声を出すこと。
下 組	・先生が指導する方法である。 ・先生の歌を聞いて、自分も歌って見る。 ・乗り子の経験がなかったので、祭りでは聞いていたが、歌うとなるとむずかしかった。 ・いきなり太鼓と合わせるのはむずかしいので、歌ってもらい、太鼓も叩いてもらい、個人練習をし、徐々に、四つ太鼓と合わせていった。 ・むずかしいところ 息継ぎのタイミングで、一呼吸おいた後の入り方や息を継いだ後の入り方である。 ・発声の仕方（普段の声と違い腹から出すところ）。 ・テンポをゆっくり練習しておく、本番は雰囲気テンポが変わっても歌いやすい。 ・太鼓と歌とは、お互いがふしの切れ目で合わせている。
紀小竹組	・表 9 参照 ・夜は、音頭取りの交代がむずかしいので、「乗り子」と書いた提灯を渡しながらか交代する。 ・音頭を取るときでも、乗り子に聞こえるように、極力四つ太鼓を担ぎながら。 ・子どもが音頭を取るときは、大人の肩車に乗せる。
御坊町	・練習は、当番になったときに乗り子に合わせて歌うこと。 ・そのときまでに、自習で歌詞を覚えておく。 ・先ず、歌詞をおぼえ、ふしは上手な人の歌を真似ておぼえる。 ・そして自分のふしを作り上げていく。 ・むずかしいところは、歌詞が読めないことと太鼓のリズムと合わせること。
名屋組	・聞いて覚えて、ふしの伸ばし方などをアレンジする。 ・乗り子を経験しておぼえた。練習は個人で行い、四つ太鼓の練習に合わせて歌う。 ・先輩の音頭取りからの助言は特にない。
東蘭組	・立候補して、先輩の歌を聞いて練習してゆく。 ・初めてのときも、先輩が教えることはない、祭りの現場で先輩の歌が聞こえる場所で聞きながらおぼえていく。
春日組	・表 9 参照 ・道中では、音頭取りは集まって行動する。リーダーがまとめて歌う順番を決めている。

	・祭りの本番では、声が届きにくいので、拡声器を使う。 ・乗り子と音頭取りとのリズムを合わせるために、また、太鼓の響きもよいように、練習はできるだけテンポをゆっくりする。
上 組	・自然に聞いておぼえて育つ。 ・音頭取りの練習は特にしない。四つ太鼓の練習に付き合いながら、音頭取りも練習していく。 ・人の音頭を聞いて歌詞を覚える。 ・乗り子が、中学生になると子どもの乗り子の音頭取りを、高校生になると大人の四つ太鼓の音頭取りを務める。 こうした順繰りの伝承は「上がってくる」と説明された。

表 10 にみるように、歌い手が歌をおぼえる過程およびおぼえる過程での難しさなどについては、回答者は、いろいろな表現の仕方で答えていた。表のタイトルとまとめた内容が一致していないが、近い内容を含めている。

一部の氏子組で、「先輩が指導をして育てる」方法を行っているが、ほとんどの氏子組では、「自然に聞いておぼえた技を、個人の努力で磨いてゆく」方法が採られていた。

VII. 「伊勢音頭・音頭」の芸能としての位置づけについて

質問⑧は、「伊勢音頭・音頭」の、各氏子組の芸能の中での位置づけについてたずねたものである。質問設定の理由は、「伊勢音頭・音頭」を歌う役が、各氏子組の「宿」に張り出される「祭礼役職表」に記されていないことから、役職表に名前が記されるか否かをたずねることで、「伊勢音頭・音頭」の芸能としての位置づけをとらえたいと考えたからである。

表 11 は、この質問に対する回答をまとめたものであるが、質問の仕方がまずく、回答者が質問内容を理解し難かったものと思われ、十分な回答は得られなかった。

表 11 「伊勢音頭・音頭」の芸能としての位置づけについて

氏子組	「伊勢音頭・音頭」あるいは「音頭取り・音頭」の位置づけ
中 組	・「音頭取り」は四つ太鼓のために重要であるが、名前の記入なし。
濱之瀬組	・音頭取りとしての役の名前はない。 ・役職表には、奉納係の名前が掲げられる。四つ太鼓は余興部門で、奉納に関係していないので、名前の記入はない。
下 組	・役に音頭の名前はない。メインは乗り子で、音頭は裏方だから。
紀小竹組	・四つ太鼓の世話係が音頭取りなので、名前の記入はない。
御坊町	・名前の記入はない。 ・四つ太鼓が奉納芸でなく、余興芸だから。

名屋組	・一覧表に音頭取りの名前はない。好きで歌える子、声を通る子がきて歌っている。
東菌組	・昔は、音頭取りの役があったが、今はない。
春日組	・興味をもってくれないが、必要である。
上 組	・役の中に「音頭係」という役はない。

表11にみるように、十分な回答はえられなかったが、「伊勢音頭・音頭」および「音頭取り・音頭」については、四つ太鼓の芸が奉納芸でなく余興芸であるということから、現在の位置づけにあるようである。

一方で、このような位置づけにあるからこそ、聞いたりみたりして吸収していく「芸能の伝承」の自然な姿がみられたが、この現状が、「伊勢音頭・音頭」の伝承や四つ太鼓とのリズムの合わせ方などに、どのような影響を与えているのかについては、ふしやリズムの比較分析が必要であろう。

おわりに

今回行われた「伊勢音頭・音頭」の映像記録の方法は、筆者の経験にはない方法で、この報告をどのようにまとめたらいいのか、迷った結果がこのような内容になってしまった。前もって、このような記録の方法も考えての調査収録であれば、まだ他に、よい質問設定とまとめ方があったかもしれない。

今後、このような映像記録の撮り方も、「一つの方法」として可能性をもつのであれば、質問内容を目的にあわせてはっきりさせ、時間をかけて収録し、考察するなど、準備・計画を十分に行わなければならないであろう。